

# 稲城・小森対談

## 「蓮如の果たした役割」

司会 来年の蓮如上人没後五百年をひかえて、いろんな議論が、讃仰も批判も含めて行われています。その中でこういう企画をさせて頂きましたのは、今の私たちの日本の中で、また本願寺教団の中で、この蓮如上人がどんな意味をもつことが出来るのかということに、議論を詰めてゆくことが出来ればということが目的です。

同じ広島県の御出身でございますので、稲城先生に部会長の小森さんと対談をお願いした次第です。

(蓮如の果たした役割)

稲城 広島県ではあまり使わんけどね、近畿一円ではね、「門徒もの知らず」という言葉を使うんですよ。

小森 広島でもいいです。

稲城 これはすばらしいことなんですよ。一般にはね、何のことかわからず使っておるけれど、これは太宰

春台という長野県出身の儒学者が、『聖学問答』という書物に書いているんです。大阪に若い時に来てね、大阪は浄土真宗が八割を占めるのですが、浄土真宗の門徒はどんな不幸があっても、縁起をかつがない、迷信にとらわれない、日がいいとか方角がいいとかいうことを一切いわないということをもんだ。

浄土真宗の教えが庶民に徹底した特徴ですわね。迷信ちゅうのは簡単におさまるものではない。これは人間の底に深くあるもんでね、何もないうときには他人が迷うているといるとるが、自分に問題が起きたときには、何かあるんじゃないかという気が起こるわね。だから日本人の本当の宗教を伝えたのは蓮如上人ですね。禅のような高等な宗教でも御祈禱をやっていますね、真宗以外の教えはみな日の悪い悪いを言い御祈禱をやりますよ、だから真宗の教えを

徹底したのは蓮如さんのおかげです。

それでね、親

鸞聖人は、蓮如上人が出られなかったらどうなっているかわからん存在ですよ。なぜかというと、明治の終わりから大正

にかけて、親鸞聖人抹殺論が出てきて、あれは架空の人物で、本願寺の覚如という方がでっちあげたものじゃという説が出てきた。それが大正九年にね、辻善之助という先生が、「親鸞聖人筆跡の研究」によって実在の人物ということを証明したわけですよ。辻善之助博士は西本願寺の門徒ですから。そういう架空的人物と言われる程知られていなかったのですね。五木寛之さんの『蓮如』の中にも、「わしの近辺にいる人間で、親鸞ちゅうのは誰も知らん人がいないが、蓮如ちゅうのは誰も知らん」と書いてお



稲城選恵さん

ります。ところが親鸞聖人を現代にこう広めたのは蓮如さんでしょう。蓮如さんがおられなかったらどうなるかわからん。

真宗内部では別にしても、浄土宗内では親鸞聖人はあまり問題にされとらんからね。浄土宗の西山派の静見という人の『法水分流記』という書物に初めて親鸞という名前が出てくる。浄土宗の学者でもあまり認めとらん。現在の『浄土宗大辞典』の親鸞という所を引くと、「庶民の中に生活す」と書いてある。浄土宗の人は客観的に見ているからね。だから蓮如さんがおられんと親鸞聖人は消えてしまうかわからん、現代の本願寺があるかどうかとも疑わしい。われわれが浄土真宗に遇えるのは蓮如さんのおかげじゃというてもまちがいないと思う。だから蓮如さんの悪口をいう連中は、蓮如さんのおかげだということをお忘れとる。龍谷大学や大谷大学のとんでもない学者が蓮如さんの悪口を言うが、蓮如さんが出られんと龍大も大谷もないんじゃないからのお。一つの宗派に二つの大学を持つとるのは浄土真宗しかないんじゃないから。

(往生の問題―生後の一大事について)

小森 蓮如さんがおられなければ浄土真宗はこれだけの  
大教団になれなかったと、こうおっしゃるわけですが、問題を三、四点せつかく先生にお会いしたんですから、私の思うところをお尋ねしたいと思うんです。まずは先生に教えてもらいたいと思うことは、蓮如さんは「往生」ということをどう考えておられたかということについてです。この人の御文章を読ませてもらって、まったく死後のことのようにも聞こえる御文章があるし、そうではなくて「平生業成」というような所へ少し論点をふまえたような所もあるし、先生はそれをどういうふうに考えられ、どこが蓮如さんの本当だと考えられますか。

稲城 蓮如さんを一番きらう連中は、蓮如上人の「後生の一大事」を死んでから向こうの話しばかりにしようと行って批判するがね、これは宗教というものを知らん人間ですね。まず仏教も知らん人間です。まず宗教とは何かということが問題ですわの。

現代の宗教は英語でレリジョンと訳しますわね。これは語源の括りつける、結びつけるということからきて、神と人間を結びつけるという意味でしょう。ところが仏教では人間の外に超越者を立てませんか

ら、仏教は非常に合理的な宗教です。すると仏教には宗教というのは通じんことになるわけです。それが現在わからなくなっている。ところが逆に、キリスト教と仏教に共通点があるだろうかと考えることも出来るわけです。これはキリスト教は人間を生まれると同時に罪人として見るわけです、何も悪いことをしたことがないのに。原罪ちゅう考え方です。また仏教ではお釈迦さんでも最初から悟っているわけではなく、迷える時代があったわけだから、人間を否定的に見ることは共通点だわね。

お釈迦さまが何一つ不自由のない世界からなぜ出家したかというと、大経に出ていますわね。大谷大谷から出た『仏教学序説』という本に十一ぐらい程理由をあげていますが、三つに絞ることが出来るんですね。

一つは、生死問題。二つには、争いの問題。もう一つにはインドの四姓階級、つまり平等の問題ですわね。つまりこの三つが中心となっており、その答えがお悟りではないかと思われます。この答えを与えてくれるものでないと仏教ではないと、これが原点といえましよう。

小森 それで時間が限られているから、往生の所へ一つ

話しを持って行ってほしいんですが。

### 稲城

往生の問題というのは、第一の生死問題。生死問題は「見老病死悟世非常」とあるように、老病死の非常の時、飛行機でいえば非常口をあけにゃあならん。一足逃げ遅れたら死んでしまうという非常の時、そこから出発するんじゃないから。まずどの宗教でも靈魂を問題にせんものはまずない。靈魂というのは、原始宗教にもあるし、今でも靈感商法といってやっているけど、靈というほどやっかいなものはない。

靈の受け止め方に三つの型がある。一つはいわゆる原始宗教のアニミズム。これは実体的にとらえる受け止め方。第二番目は、キリスト教の靈魂觀。キリスト教の靈魂觀は、靈魂不滅と神の实在を信じないと成りたない。第三番目は仏教。仏教の場合には魂があるとかないとかということは無記になっている。無記とは捨置答ともいわれ、尋ねられても返事をする必要がないことをいう。ところがパーリー語の經典には、次に四諦八正道が説いてあり、これが仏教の原点である。四諦はご承知のように、「苦集滅道」でしょう。「苦」と「集」が迷いの因と果、果が先に出て因が後にあります。なぜ魂があるのかどうか問われて、返事する必要がない。

例えば広島で「齒がはしる」といいますね。齒が痛いのは今痛いんですから。なんで痛うなったのかこの場合、果が先で因が後になっていますね。じゃから、生死の問題は今この間であるから、死んでからじゃない。仏教のこれが原点でしょう。

だから蓮如さんの教えというのは三つの特色がある。一つは臨終法話ということ、いつも今がおしまい。「仏教には明日ということあるまじく候」。もう一つは、かわったことを説かない、いつも同じことを説く。そして三つ目は、私一人という特色がある。

だから後生の一大事というたら、死んでからのこととでなく、今火がついたということ、今が大切ということでしょう。一大事は取り返しがつかんです。取り返しいたら一大事じゃないんだから。一、二、三の一とは違うんじゃないから。生と死はちようど一枚の紙の裏表じゃから、後生の一大事の解決がなければ、今生の一大事の解決はない。勝つと思うたら負けることが解決、儲けようと思うたら損をすることの研究、それを別個に抽象的に向こうにながめるから混乱する。仏法の話は、靈問題の如く今ここに生きているわたし自身に問いをもつことです。親鸞

聖人でもそうです。本願に遇うというのは、「今、選択の願海に転入せり」とおっしゃっている。そういう所に往生や生死の問題を向こうにみているから、蓮如さんの話しもすべて死んでからのことになっていく。今は用事がないことをいっとるということになるんですよ。

小森 先生のそういう話しを聞けば、そういうふうな解釈も出来るのかなあとと思うけれど、やはり御文章を読んだら、たとえば、「それ人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、」とか「朝に紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」云々というようなものを見ると、結局一般民衆が受け取ったものは、死後の世界のようには思えませうなあ。それを先生が今のように解釈されれば、後生は今のこと



小森 部会長

だと、後のことと考えるのじゃなくて、今を考えなくちゃならんのだと、これは全くそのとおりですわね。しかし、あの御文章から受け取る印象は、世間一般はそれとは全く逆の印象で受けとるんじゃないやないですか。

稲城 それが本当の仏法者というのは、今の火がついた問題として受け取っている。たとえば後生の一大事が苦になって寝られんという人がたくさんおる。しかし今頃は後生の一大事が苦になって寝られんという人がおらんです。

その後生の一大事とは何かというたら、「あんたは気の毒に、ガンで長うもって四十日、早ければ、一月もたん」ということになる、今の問題になってくる。しかし今はまだ死んでいない、後四十日あるんじゃないから。じゃから人間に問いを持たんと向こうにながめることになる。

小森 それで先生、そこは私もよくわかるんですわ。後生の一大事は今の問題でなかったら意味ないですわ。ところが、蓮如上人が言われとるのは、この世は五十年・百年の楽しみじゃあないか、すみやかに永久の問題を解決する所に目を向けると。今の問題だというのは、今、目を向けなけりゃあいかんという

ことですけど、その目を向ける方向が、五十年・百年のサイクルでなくてもうちよっと向こうを見よということ。それはさっき先生が「無記」といわれたわけで、その「無記」ということが、現実をどう生きるかということに重点があるとすれば、五十年・百年の問題は大事なんじゃないですかね。

稲城

人間の五十年はあつという間の出来事。しかし仏法の話は永劫のことじゃの。単なる時間のことじゃあない、後生は永生の楽果じゃからの。

小森

そうしますとね。私がなぜ往生を問題にするかといったら、通常一般人の人は往生いうたら死んだ後のことと思うとるけど、死んだ後のことは「無記」でしょう。その問題について、五十年・百年という生きてる間のことと、それからるか先のことを考えて後生の一大事に気がつかにゃならんということですが、何に気がつかにゃいけないのでしょうか。

稲城

それは己自身ということでしょう。キルケゴールという人が実存ということについて書いています。これがちょうど後生の一大事とあてはまると思うんじゃない。一つは絶望です。これはなんぼう肩書きや名誉・地位をもっておっても、ガンで後四十日ももてんようになつたら絶望ですわの。そうすると残るの

はたった一人しか残らん。主人が隣りにおつても奥さんが隣におつても子どもがおつてもたった一人、孤独ですね。そしてガンで四十日というのは四十日あるが、今日私が帰りに交通事故に遭うかもしれないという、この自覚にたつと虚無のドン底につきおとされる。それを一般人に人間はそういう立場に立つとるからはけ口は二つしかないですわね。一つには、

よける。もう一つには誤魔化す。おれだけはいじょうぶと、隣りの人の死は私には関係ない思うておりますからの。とくに坊さんというのは、門徒は死ぬが、自分は死ななと思うとるからの。なかなか後生の一大事がわからん。せつかくの問いもいっこうに誤魔化してしまうんじやお。この問いに対する答えが仏法、それが生死出づべき道、それを涅槃、ニルバーナーというんじやお。涅槃というの煩悩を消す、煩悩を消したら悟りに到るんじやおから、超えるんじやおから。

小森

その先生、超えるというのは、たとえばガンの宣言をされて一カ月とか二カ月とかこうなつたときに、そういう人に色々出会いましたけどね。ついこないだも私の友人がなくなりましたけれど、私はもう覚悟はしてますと言って、死ぬる二十日ぐらい前に、

自分で車の運転をしとるんです。わたしはまあそう言わずに、市議員をしていたから、まだ次の選挙の準備もしようではないかというたが、「わしはもう覚悟しとるんじや。次の候補を選んでくれ」いうて帰りましたが、二十日ほどして亡くなったんです。その人間は、死に対する考え方では、あまり信心も何もない、ごく普通の人間でしたが、それでもちゃんと平然としておられる人がいるのを、私は見てもすけどねえ。

稲城 そりゃあえらい。

小森 仏教ではいつも臨終と思えというような話しは先程からありましたけれど。蓮如さんが言われた後生の一大事という感覚というものは、そんなに格別のことをしなくたって、そういう人はたくさんいますよ。私の母親なんかは二・三日前から、「死ぬる！死ぬる！」と言っていましたわ。「今日の日にわし死ぬるいうのに息子のお前が、また今日も出るんか」と朝言ったんです。「何、死ぬる死ぬるいうて死んだものはおらん」言うて私は出ていったんですが、私が夜遅く帰ってみると、私を待っているようになかった。で、「もうわしはこれでおわりじや」いうて、ゼーゼーいうから喉を取ってやろうと、頭を

かかえて割り箸へダッシ綿をくつつけて取ろうとしたら、コクツと息を引き取った。その前には、「長いことお世話になったのう、あんまりわしやあ病人としても無茶をいわんかったろうが」と言うて、非常に達観した態度で死にましたが、それが六十一ぐらいですよ。じゃから蓮如上人は後生の一大事ということで、簡単にいうたら、何を覚悟せよと言われたんでしょうか。生への執着を断ち切れという意味でしょうか。

稲城

そういう生への執着を断ち切る、その問題の解決が仏法じゃからの。それは一般仏教では煩惱を断ち切るというわの。「災難に遭うときは災難に遭うがよろしく候。」というように『般若心経』はこの意味じゃわいの。死ぬことも災難も執われにやあ恐くない。ところが我々は、執られるから絶対逃げることでできん。煩惱のまままで超えてゆく、これが南无阿弥陀仏、これが私に届いていることが南无阿弥陀仏、念仏一つで、死のうと生きようと用のないことがわしに届いていること。じゃからこれは誰にもできる。これを自分で執われんようになろうと思うたら、できる人とできん人が出てくる。ところが誰にも届いている念仏の法に遇うと、このまま死のうと

生きようと用のない心が生まれる。

小森 例えば私は色メガネをかけて失礼しておるんですが、眼がよくないんですわ。それで昨日も東京である友人と話していてね、もう一回政界に復帰せよというようなことをよく言われるんですわ。だがチョット待ってくれ、わしは眼がこうだから、この眼がもつ間に何をして死なねばならんかということを考えとるんじやと言うたんです。これは死に對する私の覚悟ですわね。明日とか明後日とか言うたら先生言われるように私はまさか人生の終焉とは思ってないですよ。まあチョットとした十年とか十五年とかの間でこの眼がダメになるまでに、読むものも読みたいし書くものも書いておきたいと思うんです。

後生の一大事というのは先生、結局そう言うことなんですかね。それがわからんと一般世間は、蓮如上人が後生の一大事、後生の一大事いうても、死んだら恐ろしいことがあるいうて恐ろかしとるようになるんですわ。

稲城 いや、後生の一大事が仏教の原点じゃから、何も親鸞さん蓮如さんに限ったもんじやない。この問題の解決を仏教というんです。一番古い仏教經典は中村元先生の『仏陀のことば』というのがありますわ、

そこそこにお釈迦さまが老死にいかにか執られんようにするかが出ていますわな。越後の良寛さんが、「死ぬるときは死ぬがよろしく候」というているが、他人ではなくて、わしがついてゆけるかゆけんかというところが問題なんよ。親鸞さんと蓮如さんは、良寛さんの理屈はようわかるがついてゆけん、それが煩惱具足の凡夫というておられる。その煩惱具足の凡夫のまま、超えてゆく道がお念仏じやの。

#### （「五障三従」について）

小森 それで先生もう少し突っ込んで聞くんですけど、さかんに蓮如上人は、五障三従の女人の身ということをおっしゃっとりますわね。これになるとやっぱり往生に關係して、五障三従の身だから、このままでは浄土に往生出来ない、よって変成男子ということになっこうで、往生できるんだということをおられる。それは、五障三従の身で、往生のことを、御生の一大事をよく考えねばいかんよということは、あなたは地獄に落ちるかもしれんよと、いう意味じゃと思うんですわね。そうするとさっき魂があるとかないとかは「無記」とこう言われたけれど、やっぱりみんなに話しをする時には、地獄があ



ると、だから後生の一大事に地獄に落ちちゃあいいけんということに対するあなたの心がまえですよと、こんな意味にとれるんじゃないですかね。

稲城

いや、これはなんですね。地獄とか極楽とか一番よく出てくるのは『御文章』ですわね。もう一つは『歎異抄』です。親鸞さんはあまり使っておられんですわな、地獄、極楽というのは。しかし、アメリカがあるような、月の世界があるような、実在として受け取るとしたらおとぎ話ですな。どういう受け取り方かということをまず極楽ということから申しましよう。

四通りある。まず第一番目は、地獄・極楽ということを初めから飲み込むんです。飲み込むというのが一番強い。これは子どもときから親からしみ込ませてもらう。しみ込んだのが一番強い。理屈を言うものでもいざ言うたら出てくるのが迷信、じゃから迷信は科学では絶対解けない。こういう点で小さい時の教育が大事。

第二番目の受け取り方は、批判的に受け取る。これは小学校の高学年から中学校・高等学校、いわゆる西洋の合理主義の教育、いわゆる実証とか論証でないというものは認めんからの。この合理主義

は今まで飲み込んだものを吐き出してしまっ、ダメじゃとバカにする。

第三番目は道徳の矛盾から出てくる。道徳ちゅうのはね、だいたい英語ではモラル。語源のMOSは慣習です。習慣というのは相対的なもんじゃから崩れる、崩れるからね。善というのは悪がなければ善はない。正しいというのはまちがとるということがないと、正しいということははっきりしない。ところが一緒にしたら崩れてしまっうから一緒にするわけにはいかん。

第四番目には、道元禅師が「仏道をならうは自己をならうなり」というように、宗教は「おのれ」が問題になるかならんかじゃの。この私



対談の場所から見える本山御影堂・阿弥陀堂

を外にしてあるかないかというのは戯論じゃの。親鸞聖人はたとえ『歎異抄』に、「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」とありましよう。「いずれの行もおよびがたき身」というものを外においたら、地獄というものはない。だいたいもともと『往生要集』の地獄は全部そうなっています。もともと地獄と固定的に見るのは外道の解釈、仏教はそういうことを認めない。じゃからお浄土はあるかないかじゃないでしょう。南无阿弥陀仏が届いている、因が果になったんがお浄土や。じゃから真宗のさとりは証明の証と書きましよう。「至安養界証妙果」と言いましよう、あれが因が果になるという意味です。英語でリアライゼーションという、あるかないかの世界ではない。

小森 それは、私はそれで先生と私の間でよくわかった問題は蓮如さんの時代に、五障三従の身であると女性に、「お前はなかなかたすかりにくい身だよ、それを阿弥陀さんが助けてやろういうて、変成男子を示されとるんじやと、繰り返し繰り返し言われとるわね。それは女性の皆さんに、地獄が実在するかのとき印象を与えてものを言っているように私には見えるんですけどね。だからそれは単純に人を見て

### 稲城

法を説く世界ということですませたいんですかね。いや、それは現代の時点と五百年前の時点では歴史の場とか背景が違いますわね。じゃからそれを同じに見るとこっけいに思われる。それはね、蓮如さんは、伝道に一番力を入れたのは女性ですからね。女性もね、一番中心は子育ての最中の人の女性なんです。親鸞聖人の御和讃に「アマ」を「ハハ」と左訓されている。それは子育ての最中ですからね。今じゃったら三十代から四十代の、小学校から中学校の保護者の人が対象。これは前の総長（松村了昌氏）に何回も言うたことがある。「若妻会」に力を入れない、迷信というのはここについてくる。蓮如さんはこれが中心なんですよ。昔のことですから文字もろくに知らんし、まあ五障三従というのは、その当時の常識ですから、もう仏教一般、日本全体でそういうことは言うんじやから。皆が言わんような中でそういうことを言うたんだったら何で言うたんならと文句を言いますが、その時代のことを今と同じ視点で考えるとバカなことということになるでしょうが。親鸞さんと蓮如さんの時代も違いますから。小森 それで私が惜しむらくはと思うのは、時代が違ってからああいう説き方になるのはよくわかるんですが、

しかし、この五百年後のわれわれが、蓮如さんに大きな関心をもつとること、あるいは八百年前の親鸞聖人に関心を持つことは、ある程度五百年とか千年とかの時代を超えた、なるほど、こう思うようなものね。そういうものがなければならぬのじゃないかと、それを後の人が、時代が違うということだけで説明をしたんじゃないか、あまりに「最原の引き倒し」になつとるんじゃないか。

そこでひとつ引き合いに出したいのは、道元禪師が五障三従の身ということに対して、セセラ笑いのように書いたものがあります。どういうていうとるかと言ったら、「女で罪の浅いものもおるし、男で罪の深いものもいる、男と女と何が違うんか」と。また古来日本で、まことに不思議なことがあるが、それは五障三従の身だというが、それを考えたらおかしくて腹わたがち切れるほどだと言つて書いています。

それからすると、蓮如さんにもう少しそのへんの所を、方便ということはわからんでもないけど、いま御文章をそのまま受け取るものがあるでしょ。だからそこらの点が蓮如さんの少し足らなかつた所だったんじゃないかなあと思うんですけど。

### 稲城

これはね、時代背景が違うから。蓮如さんの時分、五障三従というのは浸透しとつたと思うね。女性差別はインドからあるわね。戒律でも男性は二百五十戒で、女性の場合は三百四十八戒。しかし本当の意味は女性差別じゃないんです。男が女性を思うから引つ掛かる、煩惱を持っておるから。そういうことから女性をとにかくまあ敬遠するということなんですわ。

### 小森

本当は男が悪いんよ。それをどうして男が悪いと言わなかったかということがまだまだという。

それは『マヌ法典』が悪かったということになるが、それをその後引き継いだ仏教が、そのことをどうして突破しなかったか。それはそういうことでしよう。これだけの規模で蓮如上人の五百年法要をやるんだから、五百年・千年の長さに耐えるようなものがいるのではないかと思うのです。

### 稲城

宗教というのは、こういう受け取り方が宗教ではないかと思うがの。法然上人が耳四郎の話しをしとられるが。耳四郎というのは強盗殺人の泥棒じゃが、その耳四郎が法然さんのところに泥棒にはいりましての、床の下におつたらちようど法然さんが御法話をされていて、法然さんの言葉が耳に入ってきた。

ああした泥棒ちゅうのは頭がええんじゃの、法然さんの言葉が胸に響いてきた。それでその日泥棒が来ず、あくる日法然さんに直接お会いして、「この耳四郎のような悪党でも救われましようか」とこう聞いたら、法然上人はこうおっしゃった。「この法然でも助かるのに、耳四郎お前が救われんはずがないぞ」と。この受け取り方なんじゃの。女性は女性でそういう受け止めをするし、他人より自分が罪が軽いと思ったら墮落じゃわの。そりゃあ、昔の時代背景を考えたら、そういう受け取り方をせんと、どうですかの。

**小森** そういうことを単刀直入に言えば、いろんな事を説明して、非常に深い、一種の宗教哲学的なね論理がずーとって逆転した世界でこう受け止めるべきだという説明は、けっこうなことじゃと思うんです。で、問題は通常世間の人にサッとそれが耳に入るか、腑に落ちるかということが問題なんで、私らのように社会運動とか政治運動とかするものは、やっぱりある程度は言葉の意味を持ってみんなと話しをしなければなりません。それでチョッと蓮如さんの御文章を批判的に言わざるを得ないところが出てくるんですよ。

### 稲城

そりゃあね、そういうものはたくさんありますよ。例えば親鸞聖人でもやはりそうですよ。そりゃあやっぱりその当時の時代背景の上でどう解釈するか、というのを仏教の言葉で、会通といいますが、現代にわかるように会通せにゃあいかん。これはこちらの方の怠慢ですわ。

### 小森

しかしその説明をする時に、また抵抗のある説明をしようとかえていけんからね。そこが問題だと思っんですよ。

それで確かに私も親鸞聖人の和讃で気にかかるところがあるというのは、簡単に言うとまず「旃陀羅」の問題ですな。いつか真言宗高野山で、『性霊集』の中に、「旃陀羅悪人なり」という言葉が大問題になって、真言各宗が自分の宗派の考え方を全部書いて、私が部落解放同盟中央本部の書記長をしていたから、弁解してみた文章をもらったことがある。しかし空海さんの場合はひどかったけれど、親鸞さんの場合は非常に言葉が少ないし、あまり問題にしていななんですわ。私の咽にかかるものが親鸞聖人の場合は少ない。しかし蓮如さんの場合、五障三従というような差別に繋がるものがあまりに数が多いんですわ。それでね、今日段階の今日的言葉をもって、

仮に仏教に皆の目を向けてもらおうとすると、私も仏教広まれと思うとりますから門徒の一人として、そういう思いで言うにしても、蓮如さんの場合は咽にひっかかる。

稲城 そりゃあね、蓮如さんの場合はね、女性が対象だから多いんですわ。親鸞さんの場合は、女性を対象にしとらんから、蓮如さんの一番力を入れたのは女性だからじゃの。

(「王法為本」について)

小森 それで先生次々話しは移りますが、次に「王法為本」の問題です。「表には王法を先とし、内心に深く信心をたくわえて」とありますわね。そこを聞いてみたいんですわ。

先生、「信心を内にたくわえ」ということになる、人間として持っている、それは人間としてもっとも大切な、外がわに行動として表れないと、信心というものが広まるとか他人に影響を与えるということはおきんのじゃありませんか。内側にだけたくわえるということになれば、権力がやりたいことをやっていても、それに対してチョツとまあおさまっとけえということになるんじゃないですか

あ。その点はどうですかね。

稲城 だいたい宗教と政治というものは、これは大事なことは大事なんじゃけれども、宗教というのは主体的な個の問題じゃわね。政治はね、例えば今は交通規制や交通に関する法律がたくさん出来ているわね。わしの所で昭和三十年頃に交通事故で死んだ人が二人ほどおるんだわね。しかしその時分は保障は何もない。運が悪かったというくらいなものじゃ。ところがようけえ死ぬと政治問題になりました。しかしあの時分に死んだ人でも今死んだ人でも、生命に同じ価値がある、かけがえのない大事な生命を失うんじゃないから。ところが昔には一人死んだぶんには政治問題にはならん。一より多が主になる、そこが宗教と政治の立場が違ふところじゃということをはっきりせんと、宗教はたった一人の問題、そういう所の場が違ふ。それを同じ次元で見るとわからんようになる。

小森 だから政治に直接関わろうとする宗派の行動は宗教を逸脱した世界だと思っんですよ。

稲城 そうそうおっしゃる通り。

小森 浄土真宗も、仏教には仏教の立場がある。だから宗教者は宗教者としての世界で取り組むべきことを

取り組んで下さい。政治家と全く同じことはないという事は広島ではいつも言うてるんですわ。

それで、宗教の世界で、信心を決定しなきゃならんという事はしっかり強調してよいと思うけれど、そうならば何で王法を先としてということをやわにゃあならんか。それは逆の意味で宗教が政治の方に足を踏み込んでおることになりゃあしませんかなあ。

稲城 イヤー、蓮如さんはね、決して政治と宗教は混同はしとらん。ちゃんとけじめを立つとる。

小森 いや、けじめを立つと思うて蓮如さんは言われとる、主観的には。しかし、本山が、今の自民党のやりようすることにはあれはあれらのやりようすることじゃけえ歯むかうな、尊重しとけえという必要はないわなあ。王法のことを言う必要はないでしょう。それを蓮如さんが言われとるので、そこを王法為本じゃと思うんですよ。

稲城 それは、王法為本ちゅうのはね時代背景ちゅうのを考えにゃあいかんと思うわの。ただ蓮如さんは、不必要な争いは絶対さけておられる。

小森 そりゃあそう、私もそう思います。

稲城 蓮如さんという人は争いをきらった人でね、宿善

・無宿善のさたをして勤化せよというわけ。それは押し売りをしないということじゃね。これだけの大集団になりながら押し売りをしていない、創価学会は押し付け脅迫するけど、本願寺はそういうことはない。

小森 私は蓮如さんが、無駄なことはするなといっておられる気持ちはよくわかるんですよ。私もいろんな大衆運動をやってきて無駄なことでトラブルを起こすなと言ってきました。その意味では蓮如さんが氣を使われとることについては、よくわかるような気がするんですよ、現在の時点でも。

しかし、その無駄なことをするなと言うことと、王法を本としてというのは、そこまで言ったら、宗教の世界を逸脱して、逆の意味で、政治に足を踏み込んでいるんじゃないかと。内心に深く信心をたくわえるということになると、仏法者は、実践とか行動とかやっぱり人間一人の生活には行動というものが伴うわけで、行動というものの中に、その人にかかわっての世法とか王法とかいうものがあるから、それが信心から言うて矛盾する場合には、背中を向けるか、抵抗するかというものがあってしかるべきだと思っけれども。その「信を内にたくわえ」とい

うのは、すぎたることのように思いますが。

稲城

いや念仏者には、その信から出てくる報恩というのがある。「寝ても覚めても称名念仏」というあれじゃがの。報恩というのが大事なんじゃ。これが念仏者の生活実態じゃ。すべてのものを無駄にしない、そこから仏法領というのが出てきましようがね。紙一枚にいたるまで、あらゆるものを捨ててゆかないというんじゃから、決して閉じこもってゆくもんじゃない。

小森

そうなると先生、以前東本願寺の宗務総長をされた訓覇先生が差別事件を起こしたんですよ。その時私が、書記長しとったから追及したんですわ。その時追及はこういう中身だったんですよ。「わしは恩師清沢満之先生の自己とは何ぞやということは今しばらく追求したい」と、「もう後があまりないから」と。私はそれはそれでけっこうなことだと思うんですよ。ところがそのついでに、「同和とか靖国とかいう問題をわしはやっとる暇はないんだ」といつている。それは私はよけいなことだと思うんですね。自分が出来るのなら出来んでいいんですよ。だいたいわかかって、若い研修生に、「君らは同和じゃ靖国じゃ言いよるが、わしはもう出来ん」というの

なら。そのうえ、「このごろは女が住職にならせよと言ふとるが、あれは気が狂うとる」とずいぶんずれ込んだことも言われたんです。それでわしは、「おかしいじゃないですか、あなたには仏教にとつて非常に大事な大慈大悲心ということを忘れとられるんじゃあないですか」と。要するに、「同和問題で人が苦しんでいようが、靖国問題で、信教の自由を護ろうとする人がいようが、そんなことはわしには関係ない」と言われるんで、「それは親鸞聖人の教えと違うんじゃあないですか」と。私は訓覇先生に、「あなたと私では、仏教の学問の知識から言えば、月とスッポンほど違うけれど、一度親鸞聖人という鏡の前に立たれて、あなたの腹わたを出してみて、大慈大悲心ということが腹に入っとったかどうかやってみて下さい」と言うたんです。すると、「親鸞聖人の前に立てと言われて、親鸞聖人の弟子が立たないわけにはいかんから立ってくる」というて別れたんです。それで二・三カ月して会ったら、「わしは大慈大悲心のことをわかつとるようで本当は棚上げにしとった、どうも恥ずかしい次第だ」という発言があつたんです。それで、「わかりました」と。「先生がそこまで大慈大悲心を棚上げにしとったと

言われりゃあ、私はやっぱり先生は反省されたと思  
う」と言って、その事件は終わったんです。つまり  
蓮如さんの時代に、王法によって苦しめられとる人  
もおりますわな。あの時代はちょうど荘園制が崩壊  
しかけてね、守護・地頭が、守護請だ地頭請だとい  
うて、ちょうど税金の二重取りみたいになった時期  
なんです。だから非常に苦しかったと思うんです  
よ。だから無碍の一道を信じた門信徒が、ワーと行  
きかけて、それを蓮如さんが、無駄なことをするな  
と言われたんだと思うんですがね。その「王法を本  
とし、信心を内にたくわえ」というそれだけだっ  
たら、仏の非常に大事な大慈大悲心というものが、  
チョッとおろそかになっとるんじゃないかと思うん  
ですよ。

**稲城**

宗教というのは他の問題と違って内の問題で、外  
を向いた問題とは違う。じゃから内からは報恩とい  
う姿で外に出てくる。すべてのものが生かされて、  
あらゆる者を拝む世界じゃからの。開かれとる世界  
じゃから、王法為本というのは誤解されやすい。  
取り込む信というのは自力の信で、剛強心とい  
うんです。それに対して他力の信は、柔軟心とい  
う。一般の信は自分のところに取り込むという自力の

信で、自分がいいには一切通じない。自分の殻の中  
に閉じこもってしまう。それを親鸞さまは疑城胎宮  
とおっしゃる。ようわしの信念とかいいましよう。

誰がどう言ってもわしは間違っておらんという。信  
念というのは自力の信、聞く耳がない世界。他力の  
信は柔軟心、どんなものも聞く耳をもつちゅうこと。  
**小森** そのことと関係して、王法の問題を説かれとる中

で私の気にかかるのは、守護や地頭に、「年貢とか  
公事をおこたるな」ということを何度もおっしゃっ  
ているわね。それはやっぱりあまりにも王法の方へ  
加担をした、あるいは世間的な相対的な価値観を進  
めすぎとるように思いますがあ。

**稲城**

それはね、蓮如さんは争いをきらった方じゃから  
ね。そういうことだね、かえって念仏者が逮捕され  
たりという問題が起こってくるから、争いをなくす  
ために世間通途の儀に従うという言葉なんでしょう。  
それは迎合でも何でもないですよ。

**小森**

だけど、荘園制がだいぶ崩れ、世の中はいいかげ  
んなことになってたんですよ、あの時期に。荘園領  
主に年貢をはらわなくなりましたよ。広島県の世  
羅郡甲山町に高野山の荘園があるが、そこを調べて  
みると、その当時年貢を守護が横取りしている。訴



訟になって裁判をして、それじゃあ何年分か払いましようということになったが、払うたか払わんかわからんようなことになったとるらしい。ですけれど、全体として莊園制が崩りようるときに、蓮如さんが、わが方（念仏者）に向かって払え払えと言われたんかなあと。払うと払わんじゃあ、払わん方が楽なんですよ。

**稲城** まあ、不必要な争いはせんという、そういう所があるんでしよう。

日本の歴史でこれだけの方はおらんですよ。そりゃあ、本願寺が潰れかかったのをこれだけの大教団にしたんですから。そりゃあ蓮如さんが出られんと真宗はどうなっとるかわからん。あるかないかわからん。

しかも、浄土真宗の教えが庶民に浸透した。妙好人というのは外の宗旨にはひとつもない。浄土真宗では興正寺と東西本願寺の三派しか出とらん。これは全部御文章の影響です。日本人に本当の宗教を伝えたということでしょう。外の宗旨はなんぼう高度な教えでも、民衆の所にはないんじやから。

（蓮如の母について）

**小森** それで先生、最後に蓮如さんの生母についてですが、この人は「豊後の国とも」となっとりますわな。豊後に「とも」はないから備後の「とも」じやろいう説がありますが、そういうことについて先生の考えはどうですか。

**稲城** これはね、蓮如さんの晩年の子どもの実悟と云う人の記録『実悟記』にあるんです。「わが母は西国備後の人」と。それを四条の道場から聞いたとある。四条に時宗の大道場・金蓮寺というのがあったが、これが蓮如さんの十才の時に焼けている。蓮如さんのお母さんは、十二月二十八日、夜こっそりと出ていった。お前の一生に本願寺を復興するように言い残して去って行った。どこへ泊ったかいうてもその時分は京都ホテルはなかったし、どこへ泊まったかわからん。当時の本願寺は知恩院の中にあつたからそこから十分ぐらい歩いたらいけましよう、四条大橋を渡つたらすぐそこじやから。そこから備後の鞆（とも）にかえつたんじやろ。備後の鞆には本願寺いうのがありますわな。今もそこは時宗本願寺と書いてありますわね、いろんな物が残っています。そこはまた蓮如さんのお母さんが出家したというこ

とで尼寺ともいいますわな。ここが一番有力ですな。他の先生は、豊後の「とも」という人もありますわな。豊後の「とも」は「都望」と書くんです。そこに蓮如上人の生母の墓ちゅうのがあるんです。そこに蓮如上人のお弟子さんが建てられたという寺もある。これも有力じゃがの。

尾道にも時宗の寺があるじゃろう。

小森 その寺（浄土寺）にはこないだ行ってみました。名残りの名号じゃいうのがありました。

稲城 ありゃあチョット伝説じゃな。あれは江戸時代の蓮如上人縁起に出ています。

小森 それで蓮如さんのお母さんが身分の低い人じゃったと、時折書いてありますが、願の本願寺の近所に被差別部落があるんですわ。それであそこに蓮如さんのお母さんの話が残っているということになれば、お母さんが当時の被差別の出身いうことはありうることよね、確定は出来んけど。

稲城 それは、蓮如さんが庶民に仏法を伝えたということに何かつながるとるかもしれんのお。

小森 そりゃあもう、前からそのことは無条件に敬服しとるんですよ。蓮如さんがいなかったらこういう状況はないし、わたしが今日蓮如さんの問題で先生と

議論することもない。そこは感銘しとるんですわ。ともかく本日はどうもありがとうございました。

（一九九七年七月二十九日）

本願寺同朋センターにて対談）